早稲田大学演劇博物館　演劇映像学連携研究拠点

NEWS LETTER

演劇映像学連携研究拠点
February 2011
Number. 1

■ 拠点代表あいさつ　1 p
■ 拠点主催企画レポート　2 p
文学座との共催シンポジウム
「新劇の過去・現在・未来～
『女の一生』上演を巡って～」
■ 平成 21（2009）年度
テーマ研究・公募研究成果報告　3 p
●テーマ研究　3 p
●公募研究　6 p
■ 平成 22（2010）年度の活動　12 p
●公募研究
●学会企画支援
●拠点主催イベント
■ お知らせ　12 p
●公募研究について

演劇映像学連携研究拠点ニューズレター創刊にあたって

竹本幹夫・拠点代表あいさつ

演劇映像学連携研究拠点ニューズレター創刊号をお届けする。

演劇映像学連携研究拠点は、平成 22 年度に文部科学省より「共同利用・共同研究拠点」の認定を受け、それと同時に、翌年度に「特色ある共同研究拠点の整備の推進事業」と名称変更した受託研究の採択を受けて発足した。すなわち本年が二年目にあたる。この間、ここに集う研究者の数は 100 名以上に達し、二年を通算しての研究プロジェクトの数は 30 件にもなろうとしている。本来、本拠点の事業は、演劇博物館の研究資料を利用しての演劇・映像に関する研究の推進と振興とにあり、成果の発表は個々の研究者各位が独自に世に問うて頂くこととしていた。しかしながらこれだけの大所帯となると、拠点独自の紀要の刊行への研究者各位の期待もあり、また拠点内でどのような研究が進行しているのかを、広く社会に報知する必要も生じて来た。

そこで本年度より、前者については、かねて演劇博物館が刊行していた年刊誌『演劇研究』を、従来は自由投稿形式の成果発表機関誌であったのを、外部委員主体の委員会による論文審査の態勢を整えて、何らかの形で拠点の研究事業に関わる研究者の査読論文を中心に採録することにより、拠点紀要としての性格を持たせることとした。

また後者については、年2回程度のニューズレターの発行を行うこととした。それが本紙である。本年度は諸準備のために年度末に至っての創刊号発刊となったが、次年度からは予算の許す範囲内ではあるが、なるべく年2回の発行を心がけたい。

本紙が、リニューアルした『演劇研究』と共に、この拠点の象徴的な存在として、演劇・映像研究の指標となれば幸いである。

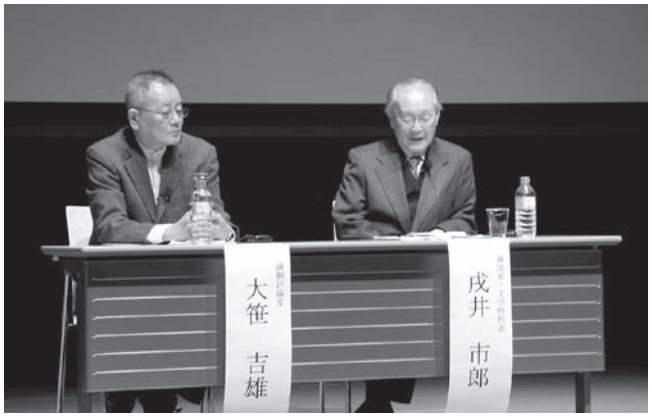
拠点主催企画レポート

2010年1月19日
早稲田大学小野記念講堂

文学座との共催シンポジウム「新劇の過去・現在・未来〜『女の一生』上演を巡って〜」

昨年一月一九日の午後三時より、早稲田大学小野記念講堂にて、演劇映像学連携研究拠点と文学座との共催シンポジウム「新劇の過去・現在・未来〜『女の一生』上演をめぐって〜」が開催された。この企画は、文学座が本年三月に森本薫作『女の一生』の上演（江守徹氏による新演出、及び主演として荘田由紀氏を起用）を行うことを契機として、『女の一生』の上演を例に取りながら新劇史を振り返り、また新劇の今後の展望を考えようとしたものである。竹本幹夫演劇博物館館長・演劇映像学連携研究拠点代表の挨拶を皮切りとして、文学座代表・演出家の戌井市郎氏と、現代を代表する演劇評論家の一人である大笹吉雄氏の対談、そして第二部では秋葉裕一副館長・拠点副代表の司会のもと、早大名誉教授・演劇博物館前館長の伊藤洋氏、戌井市郎氏、演出家・俳優の江守徹氏、大笹吉雄氏からなるシンポジウムを行った。対談の前には文学座員である荘田由紀氏、南一恵氏、瀬戸口都氏による作品朗読が加わるという、時間的には短いながらも盛りだくさんな内容になり、平日の昼間という時間帯にもかかわらず学内外合わせて百名を超える聴衆をお迎えすることができた。

まず竹本代表より、本拠点の概要及びシンポジウム開催の経緯に加え、『女の一生』の紹介、さらに演劇博物館に所蔵されている杉村春子関係資料の紹介があった。それに続き、『女の一生』第二幕の冒頭及び最終部の朗読があり、聴衆に作品世界を生き生きと垣間見させてくれた。その後の戌井氏と大笹氏の対談では、主に戌井氏に文学座に入るに至るまでの経緯を交えつつ、『女の一生』や森本薫に関する多くの貴重な証言をしていただいた。作品の同時代演劇における位置づけという点では、森本薫がいい意味での通俗性を文学座に与えたこと、その文学座は創立宣言において大人の「娯楽」を志向していたこと、文学座にはフランスの質の高い大衆演劇の系譜を継承しようとする側面があり、そのなかに『女の一生』も位置づけられることが、両氏によって指摘された。他方で同時代における『女の一生』に関しても多くの言及があり、戦時下にあって情報局の要請で作られたこの芝居に多



くの戦争批判が盛り込まれていること、初演の場所（東横劇場）を探すための苦労や空襲のたびに劇が中断されたこと、そして主人公の布引けいが近代日本のメタファーとして解釈できることなどが指摘された。

休憩を挟んで第二部、秋葉副代表の司会による伊藤氏、戌井氏、江守氏、大笹氏によるシンポジウムでは、特に江守氏の新演出が目指すものが話題の中心となった。最初は『女の一生』の台詞の調子のよさ・気持ちのよさに惹かれたものの、内容的には琴線に触れるものがなかったという江守氏は、役者として年を経た結果、言葉の裏にある喜怒哀楽の感情の深いものがあることがわかるようになった、と言う。一人一人の台詞がきちんと書かれていて長いが、その根底にある感情を出すのが大事、こういうしゃべり方は現代の生活にはありえないが、読み物としてはすらすら頭に入ってくる、これを生身の俳優がリアリティをもって言えたらすばらしい、その奥に秘めた感情を出せたらすばらしいと考えている、との江守氏の言葉が、他のパネリストの賛同を得ていた。

『女の一生』を通して文学座の役者が台詞を言うという基本を作りたいという戌井氏の発言、台詞をきちんと聞かせられる舞台を新劇は作り続けてほしいという伊藤氏の発言、作り物であるが、自然であり、真実であり、切実な問題が備わっているということをやりたい、という江守氏の発言に共通しているのは、台詞の力とその可能性に対する信頼ではないだろうか。そしてその信頼が、大笹氏の言葉を借りれば「物の言いやすい」劇団の風土によって育まれ、またそれが新たな劇団の風土を作り出す力になるのだろう。その他、杉村春子に関する証言、森本薫と検閲、森本薫と英文学の伝統など多くの興味深い発言があったが、限られた紙幅ではすべてを伝えきれないのが残念である。最後にこの企画のために多大な努力をして下さった矢部・最首両氏をはじめとする文学座の皆様、ご登壇いただいた各パネリストの先生方、シンポジウム開催に際しお手伝いいただいた館員の方々、そしてご来場いただいた全ての方々に厚く御礼を申し上げたい。（黒岩卓）

戌井市郎氏が2010年12月15日に逝去されました。謹んでお悔やみ申しあげます。

○テーマ研究
テーマ研究は拠点が研究テーマを提案して学外諸機関と連携した共同研究を行い、そこに広く研究者の参集を呼びかけるものです。研究内容は以下の6つで、研究期間はそれぞれ5年間を予定しています。2009 年度はその初年度となりました。

テーマ研究 1

日本における中国古典演劇の受容と研究

研究代表者：岡崎由美（早稲田大学文学学術院教授）
研究分担者：平林宣和（早稲田大学政治経済学術院准教授）、川浩二（早稲田大学文学学術院非常勤講師）、黄仕忠（中国中山大学中国古文献研究所教授）、王宣標（中山大学中国無形文化遺産研究センター助教）、傅謹（戯曲学院教授）

本研究は日本が中国伝統演劇をいかに受容し、日中間の演劇を通じた文化・学術交流を形成したか、ということを解明し、日本に所蔵される資料の国際的活用化を目的とするものである。本年度は初年度の基礎研究として早稲田大学演劇博物館所蔵資料を基点に、中国中山大学中国古文献研究所と共同で日本に所蔵される中国古典演劇および説唱の貴重書の調査分析を行った。その過程で、本学演劇博物館所蔵の『水滸記』抄本を発見した。本抄本は江戸期に成立したと見られる注釈付日中対訳本で、おそらく中国古典戯曲の日本語全訳本としては現存最古のものである可能性が高い。

また、本抄本を巡ってその草稿、校閲本と見られる二種の異なる抄本を山口大学と関西大学でそれぞれ発見したことから、対訳本の成立過程の足跡を見ることができる。また本抄本が拠った原本『水滸記』は明の六十種曲本であることが明らかになったが、これも現行の六十種曲本とは異なる版本で、それが日本に流布した過程も明らかになりつつある。また、原文・訓読・注釈・対訳併記という独特の編集スタイルから、これが中国近世白話文の学習に用いられたことも考えうる。

このように本書は、中国伝統演劇の日本への舶載、日本における受容の状況を解明する貴重な資料であるといえる。本研究では、さらに本抄本の全文検索データベースを作成し、日中いずれの語句からも原文対訳の画像付きテキストが検索できるようにした。本データベースは 2010 年5月中に本学演劇博物館ホームページで公開された。また、中国説唱資料については日本に所蔵される中国説唱版本について、曲種の分類と異題同話の検索が可能なデータベースの作成をめざし、書誌フォーマットを作成し、本学所蔵の資料から分類を開始した。これは 2010 年度も継続して調査を行い、東大東洋文化研究所、京大人文科学研究所など当該資料の所蔵量の多い研究機関と協力しつつ進めていく予定である。

テーマ研究 2

台本による歌舞伎作品復元の調査・研究

研究代表者：古井戸秀夫（東京大学大学院人文社会系研究科教授）
研究分担者：鈴木英一（聖学院大学日本文化学科非常勤講師）、今岡謙太郎（武蔵野美術大学造形学部教授）、児玉竜一（早稲田大学文学部教授）、安冨順（桐朋学園短期大学演劇専攻等非常勤講師）

本研究は、①基礎研究と②個別研究、からなる。

①基礎研究の目的は、早稲田大学演劇博物館所蔵の歌舞伎台本をデータ化して、公開することである。そのためには、1）データ化の作業、2）虫食いによる破損の修復、この二つが必要である。2009 年度に対象とした歌舞伎台本は、小林文七旧蔵の狂言作者自筆の台本を中心とする 172 点のコレクションであった。1）については、今年度 50 点のデータ化を計画したが、予定以上に作業が順調に進み、172 点をデータ化することができた。

その一方で、2）に関しては、助成金の決定から計画の実行まで限られた時間の中で、実現できる範囲が限られてしまった。今年度は、試験的な補修の実習を行うのみであったが、その結果、引き続き、虫食い補修の講座を定期的に行う必要があることがわかった。虫食いの補修が終わらなければ、データの公開もできないので、この問題は重く受け止めなければならない。ただし、外部の研究者を中心とする、現在の体制では、虫食い補修の計画を進めていくことは困難が伴う。演劇博物館側の善処が求められるところであろう。

②個別研究については、復活上演のための基礎研究にとどまっている。5 年間の内に、基礎研究が実り、復活上演へと結びつくことができるよう努力するが、これも外部の上演団体との提携が必要になる。演劇博物館との研究連携をどのように創り上げていくかが、課題として浮かび上がってきた。

テーマ研究 3

舞台芸術　創造とその環境　日本／世界

研究代表者：藤井慎太郎（早稲田大学文学学術院教授）
研究分担者：上田洋子（早稲田大学演劇博物館助手）、熊倉純子（東京藝術大学音楽学部准教授）、松井憲太郎（富士見市文化会館キラリふじみ館長）、滝口健（シンガポール国立大学講師）、相馬千秋（フェスティバル／トーキョープログラムディレクター）

2009 年度は、国外から複数名の講師を招聘し、学外の複数の機関と協力しながら、舞台芸術の創造と環境に関する問題系をめぐって、以下の研究活動を行った。

まず、フェスティバル／トーキョーと連携した企画 F/T ユニバーシティの枠内において、レバノン出身・在住のアーティスト、ラビア・ムルエとリナ・サーネーの両氏を招いて、レバノンという世界史的にも特異な地域において芸術創造を行うことの意義、さらにそれを取り巻く環境についての公開レクチャーを開催した（2009 年 11 月）。

ついで、英国文化政策の専門家であるジョゼフィーヌ・バーンズ氏を招聘し、日本文化政策学会と連携して講演会・研究会を開催し、英国における舞台芸術の環境整備を目的とした芸術文化政策の立案過程、英国の演劇政策の苦境の克服過程についてレクチャーを受け、日本の現状に対していかに応用できるか、議論を交わした（2010 年 1 月）。

さらに、アジア演劇創造研究センターと提携して、ロンドン大学ゴールドスミスカレッジからクリッシー・ティラー氏、フィリピン教育演劇協会からベン・サントス・カバンゴン氏、シンガポール国立大学から滝口健氏を招聘し、英国、フィリピン、ひいては東南アジアの実例に関するレクチャー、また演劇デザインギルドによる実際のワークショップを通じて、演劇環境整備の主たる要因である教育と演劇とが結ぶことができる関係を問い直すことを目的として、連続セミナー・ワークショップ「アジア・演劇・教育」を開催した（2010 年 2 月）。

テーマ研究 4

現代日本演劇の海外への紹介・翻訳プロジェクト

研究代表者：高橋敏夫（早稲田大学文学学術院教授）
研究分担者：小田島恒志（早稲田大学文学学術院教授）、ハルオ・シラネ（コロンビア大学東アジア言語・文化学部教授）、本浜秀彦（沖縄キリスト教学院大学英語コミュニケーション学科准教授）、岩野誠（早川書房・雑誌『悲劇喜劇』編集）

日本の優れた現代演劇を海外に向けて紹介し翻訳するのを目的にはじめた本研究。5カ年計画の第一年目は、実際の活動期間が5ヶ月だったので、研究計画・方法に従い研究を実行とともに、今後の研究全体のプランの確認と検討を行った。

現代日本演劇の国際化を進め、それを呼び水として海外との演劇を通した国際交流を推進するためには、まず、従来の紹介と翻訳および公演の実態を調査して問題点を洗い出す必要がある。これまでの海外公演について、主要な劇団への聞き取り調査をはじめるとともに、公演をおこなった劇団の主催者、演劇の国際交流を進める団体の関係者に長時間インタビューを試みた。インタビューは「演劇的国際交流の現在」（DVD 版）にまとめ、これが今年度の研究成果となった。

劇団ピープルシアターの主催者で、劇作家・演出家の森井睦氏には、日韓演劇フェスティバルにおける新たな取り組み（日本演劇を韓国の演出家が、韓国演劇を日本の演出家が演出し公演する）の画期的意義を、また、国際演劇協会の世界理事で舞台美術家の小田切よう子氏には、日本の短篇演劇の海外でのリーディング公演の可能性を語ってもらった。両氏の話で共通していたのは、日本の現代演劇は日本の現状をふまえるだけではなく、世界が求めている大きなテーマとどう関わるかを示さねばならぬということである。この点については、各劇団への聞き取り項目に加えた。

テーマ研究 5

演劇博物館所蔵映画フィルムの調査、目録整備と保存活用

研究代表者：入江良郎（東京国立近代美術館フィルムセンター主任研究員）
研究分担者：碓井みちこ（早稲田大学演劇博物館客員研究員）、上田学（早稲田大学演劇博物館助手）、栩木章（東京国立近代美術館フィルムセンター主任研究員）、岡田秀則（東京国立近代美術館フィルムセンター主任研究員）

演劇博物館が所蔵する映画フィルム 762 本（35mm ＝ 32 本／ 16mm ＝ 572 本／ 8mm ＝ 157 本／ 9.5mm ＝ 1 本、以上は演劇博物館の所蔵リストによる）のうち、初年度は 8mm フィルムのコレクションを対象に調査を行った。これらの多くは著名な演劇人などが残したプライベート・フィルムであり、また 8mm フィルムというメディアの性格上、他には原版や複製が存在しないものがほとんどを占めていると考えられるが、撮影された映像の内容やフィルムの状態については必ずしも充分な確認が行われていないため、今回の調査では、①個々のフィルムの作品情報（フィルムの内容や文字情報）を採集する際に必要となるメディアの作成（DVCAM および DVD へのテレシネ）、ならびに②所蔵情報（フィルム・フォーマットや尺長、素材のコンディションなど）の採集を行うことにした。ただし、今回の再調査により、8mm フィルムの所蔵数が 157 本から 271 本に修正されたため、①については 171 作品分（40 時間 22 分）のみを終了、残り 100 本分については作業を次年度に持ち越すこととなった（②の作業は 271 本分全てを完了）。メディア作成が完了したコレクションについては次年度より作品情報の採集にも着手する予定であり、今後はこれらの情報のデータベースをもとに計画的なコレクションの保存と運用が可能となる。

なお作成したメディアは、本研究の終了後も内外研究者のための利用媒体として使用することが可能であり、既に一部は演劇博物館の企画展示「六世 中村右太衛門展 歌舞伎座とのあゆみ」（2010 年 3 月 25 日―4 月 25 日）にも出品された。

テーマ研究 6

日本映画、その史的社会的諸相の研究

研究代表者：岩本憲児（日本大学芸術学部大学院映像芸術専攻教授）
研究分担者：碓井みちこ（早稲田大学演劇博物館客員研究員）、志村三代子（早稲田大学演劇博物館 GCOE プログラム研究員）、大久保遼（東京大学大学院学際情報学府博士後期課程）、古賀太（日本大学芸術学部教授）、小林貞弘（椙山女学園大学・中部大学非常勤講師）、田島良一（日本大学芸術学部教授）、本地晴彦（映画史研究家）、松本夏樹（大阪芸術大学非常勤講師）、渡邉大輔（日本大学芸術学部大学院映像芸術専攻博士後期課程）

「研究の目的」

全体の研究を、日本映画の歴史的研究、とりわけ日本映画誕生期の諸相をめぐる研究（テーマA）と、その後の社会的影響や反響をめぐる研究(テーマB）とに分かつ。

テーマA「日本映画草創期の諸相再検討」

テーマB「日本映画と社会：内外における受容と評価の比較研究」

テーマAは、日本映画史においてまだ多くの事象が不明であったり、曖昧であったりする、その事象を実証的に再検討し、歴史的事実を明らかにする。

テーマBは、日本映画の過去から現在まで、いくつかの典型的な作品や俳優を選び、国内と海外の評価・反響を照らし合わせ、社会的影響の結果を分析する。

「研究内容・計画」

2009 年度は実質半年に満たないので、テーマAの研究分担を以下のように決めた。

1 エジソンと日本 / 岩本憲児　2 初期欧米映画と日本 / 古賀太　3 写し絵から映画へ / 大久保遼　4 家庭用映像機器 / 松本夏樹　5「紅葉狩」の撮影と団十郎・菊五郎 / 本地陽彦　6 梅屋庄吉と活動写真事業 / 本地陽彦　7 駒田好洋と巡回映画時代 / 碓井みちこ　8 名古屋における活動弁士たち / 小林貞弘　9 相撲活動写真論 / 渡邉大輔　10 小林喜三郎と天活の軌跡 / 田島良一

また、基礎的研究集会「エジソンの初期映像について」を開き、技術に詳しい特別講師を招くとともに、研究分担者数名による資料説明、研究経過報告を行った。さらに、熊本県にある日本唯一の「エジソン・ミュージアム」を訪問、現地での現物資料を確認した。2010 年度は、上記の分担テーマにしたがい、研究発表集会を開きながら、各自の論文完成までたどりつく予定である。

○公募研究
本拠点の研究資源の有効利用を前提とする研究テーマを一般に公募して、審査・採択された研究テーマに共同研究の場と研究資料とを提供するものです。（研究期間：一年間）

公募研究 1

台帳「金龍山誓礎」の書誌学的研究と翻刻作業

研究代表者：木村涼（早稲田大学演劇博物館助手）
研究分担者：金子健（早稲田大学演劇博物館客員研究員）、澤登寛聡（法政大学文学部教授）、磯部孝明(総合研究大学院大学文化科学研究科日本歴史研究専攻博士後期課程)、桑野あさひ(武蔵大学人文科学研究科博士後期課程)

天保改革の一環で江戸三座は猿若町に移転させられるが、移転後の天保 13 年（1842）10 月に初めて中村座で上演された演目が「金龍山誓礎」（きんりゅうざんちかいのいしずえ）（早稲田大学演劇博物館所蔵：ロ 16-110-1 ～ 7）（作者松嶋半次・三升屋二三治）で、この時の上演のみで、その後上演されていない。

「金龍山誓礎」の台帳は全部で7冊の構成で、本年度はこれらを全て複写した。 1冊から7冊までの丁数は不統一だが、台帳の形態、出演役者、役名など表紙・裏表紙から判明する書誌学的な情報を整理した。こうした情報を把握することが、興行の実態を知る上で重要であると判断しての作業である。

台帳の1冊目は、第一番目三立目「鳩ヶ峯境内の場」、「四条松並木の場」、 2冊目は、第一番目三立目奥「紫野だんまりの場」、3冊目は、第一番目四立目「泰川勝屋鋪の場」、4冊目は、第一番目五立目大詰「三人兄弟網打の場」、 5冊目は、第二番目序幕「観音前の場」、「大井村の場」、 6冊目は、第二番目中幕「桧態老中隠家の場」、 7冊目は、第二番目大切常磐津連中「色忍郎女售」である。

そして、1冊目の第一番目三立目「鳩ヶ峯境内の場」「四条松並木の場」を分担して翻刻し校正を行った。また当演目に関係すると考えられる台帳「金龍山千本初花」（早稲田大学演劇博物館所蔵：ロ 16-138-1 ～ 6)、「金龍山創磐」（早稲田大学演劇博物館所蔵：ロ 16-436-1 ～ 4）および関連番付（大阪府立中之島図書館所蔵）を調査し複写した。さらに、猿若町に関係する「猿若町芝居の由来」「呼子どり若三町の秘事猿若町芝居地ノ図」（西尾市岩瀬文庫所蔵）も調査し複写した。

本年度の成果は、申請計画に記した通り全7冊の台帳の書誌学的情報を整理できたことと、 1冊目の台帳の翻刻、校正ができたことである。このような書誌学的検討と翻刻作業から単に芝居内容だけでなく、金龍山浅草寺との関係も含めて、江戸歌舞伎興行の社会背景を考察できるというところに意義があると考えた。

公募研究 2

狂言作者竹柴其水興行関係資料の基礎的研究と翻刻作業

研究代表者：神田由築（お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科准教授）
研究分担者:木村涼（早稲田大学演劇博物館助手）、今岡謙太郎（武蔵野美術大学造形学部教授）、磯部孝明（総合研究大学院大学文化科学研究科日本歴史研究専攻博士後期課程）、中村緑（東京大学大学院人文社会系研究科文化資源学研究博士後期課程）

本研究は、演劇博物館所蔵資料のうち竹柴其水興行関係資料とされる全 109 点の資料群（ロ 30-1473-1~109）の目録を作成して全体像を把握し、その成果を踏まえて明治・大正期の狂言作者や興行についての研究を行うことが目的である。本年度は、資料を全点カラー撮影し目録を作成した。その結果、資料の写真・目録ともに将来的に公開が可能となった。

また目録より同資料群について次のような特徴が明らかになった。まず子分類として、場割役人帳、大道具帳、大道具附帳、衣裳附帳、台本、書抜き、唄本、小道具、チラシ、筋書、目録、俳優名簿、書簡、祭礼番付、その他という分類が可能である。これらは個別の芝居の上演に際して作成されたものとそうでないものに大まかに分けることができ、前者では役名と役者名が書かれた場割役人帳や、場面に使用される大道具とそれについての但し書きが書かれた大道具附帳が中心を占める。後者では狂言作者が所蔵する脚本の目録や狂言作者宛の書簡が中心である。年代は江戸期（3 点）、明治期（8 点）、大正期（12 点）、昭和期（34 点）、近代（2 点）、記載無し（ただし近代か、50 点）である。明治期の資料については、竹柴其水が活躍していた 20 年代のものはなく、30 年代以降のもので、むしろ大正から昭和の戦前期が中心の資料群である。

以上の結果より、この資料群の年代が其水の時代よりも下ること、さらに同資料群は其水そのものよりも弟子筋の狂言作者などの関係資料ではないかということが判明した。

公募研究 3

国内外における無形文化遺産保護条約一覧表記載の無形文化遺産の音声映像記録に関する調査研究

研究代表者：宮田繁幸（東京文化財研究所無形文化遺産部部長）
研究分担者：永井美和子（早稲田大学演劇博物館職員保存修復担当）、高桑いづみ（東京文化財研究所無形文化遺産部無形文化財研究室長）、飯島満（東京文化財研究所無形文化遺産部音声映像記録研究室長）、俵木悟（東京文化財研究所無形文化遺産部主任研究員）

本研究は、これまでに蓄積されてきた国内外の貴重な音声映像資料を対象として、そのデジタル化や活用方法を探り、将来の無形文化遺産のあるべきアーカイブ構築についての方向性を探ることを目的とする。具体的には、主にフィルモン音帯資料に関して、東京文化財研究所音声映像記録研究室を中心に調査研究を実施した。フィルモン音帯とは、昭和 10 年代初頭に日本で開発された長時間録音媒体（約 130cm × 3.5cm のエンドレステープ）で、最長 36 分の収録が可能であったという。当時としては画期的な方式であったが、第二次大戦の激化により、工場は軍需施設に転用された。製造販売の期間は実質 5 年程であったため、今日では半ば忘れ去られた存在となっている。

現在、演劇博物館は 56 本のフィルモン音帯とその再生機 1 台を、東京文化財研究所は音帯 5 本を所蔵している。そこで演博所蔵の音帯と再生機を東文研のスタジオに搬入し、あわせて可能な限りの音帯を集め、再生音のデジタルアーカイブ化を図ることを計画した。基礎調査としては、現存未確認を含む音帯 114 種の一覧を作成した。網羅的な音帯のディスコグラフィーはこれが現在唯一のものとなる。一方、音声収録については、重複タイトルを含め 76 本の音帯を東文研に集めることができたが、劣化（硬化）により再生が困難あるいは不可能な音帯の多いことが判明したため、当面は再生可能なものから、複数の方式（再生機のスピーカからの直接集音・改造トーンアームによる音源採取など）によるデジタル化を行うこととした。いずれも初めてデジタル化された音源となるものと思われる。来年度からは、デジタル化と並行して、音帯の弾力性を回復するための薬品処理を、東京文化財研究所保存修復科学センター近代文化遺産研究室の協力により、行う予定である。良好な結果が得られれば、再生可能な音帯が増えるものと期待している。

公募研究 4

坪内逍遙の演劇分野の功績に関する多角的研究

研究代表者：林和利（名古屋女子大学文学部教授）
研究分担者：濱口久仁子（財団法人逍遙協会事務局長）、松山薫（早稲田大学教育学部非常勤講師）、小島智章（早稲田大学大学院文学研究科博士後期課程）、鳥越文蔵（早稲田大学名誉教授）、梅澤宣夫（早稲田高校教諭）、ダニエル・ガリモア（日本女子大学文学部准教授）、村瀬英彦（美濃加茂市民ミュージアム学芸員）

1、報告書『坪内逍遙の演劇分野の功績に関する多角的研究』（８０頁）を平成２２年2月２６日に刊行した。序「逍遙に関わる自分史」（鳥越文蔵）を筆頭に、逍遙顕彰活動の経緯と成果として、「胸像　碑など」（鳥越文蔵）、「財団法人逍遙協会の歩み・その前身から現在まで」（松山薫・濱口久仁子・小島智章）、「「逍遙フォーラム」の活動成果」（林和利）、「美濃加茂市における逍遙顕彰の取り組み」（村瀬英彦）の４本、論考として「シェイクスピアを訳した日本人」（ダニエル･ガリモア）、「坪内逍遙作『沓手鳥孤城落月』の研究史」（梅澤宣夫）の２本を収録。この研究会は、坪内逍遙が近代日本の演劇分野に果たした功績を様々な角度から検証することを目的としている。そのために、逍遙研究者と逍遙顕彰組織の責任者にメンバーとして加わっていただいたが、それら顕彰組織の過去の顕彰活動の実績と成果を報告してもらうとともに、最新の研究成果を盛り込んで報告書とした。貴重な記録として評価されるものと思う。

2、歌舞伎俳優の中村富十郎氏を講師として講演会「坪内逍遙の歌舞伎・舞踊作品をめぐって」を開催し、逍遙作の舞踊「良寛と子守」「一休禅師」演じた経験から、逍遙作品に対する感懐や思い出を語っていただいた。演者の立場から逍遙の舞踊作品の価値が浮き彫りになり、再評価につながる結果となった。

3、明治学院大学名誉教授の大場建治先生を講師として研究講演会「坪内逍遙のシェイクスピア研究、翻訳をめぐって」を開催し、逍遙のシェイクスピア研究と翻訳の業績を現代の研究水準で捉え直していただいた。日本のシェイクスピア受容史と研究史に果たした逍遙の役割の大きさと価値が、最先端の学術的レベルで明らかになった。

公募研究
5

満州における演劇・映画の諸相

研究代表者：鈴木直子（早稲田大学演劇博物館助手）
研究分担者：中尾薫（早稲田大学演劇博物館助手）、上田学（早稲田大学演劇博物館助手）、木村涼（早稲田大学演劇博物館助手）、梅山いつき（早稲田大学演劇博物館助手）、上田洋子（早稲田大学演劇博物館助手）、白井啓介（文教大学文学部中国語中国文学科教授）

本研究では、中国と日本及びロシアの演劇、映画研究者が共同で日本統治時期の満州（1932 − 1945）での市民娯楽文化の実態とその競合の度合いを究明する。

研究の計画として、演劇博物館に所蔵されている満映の機関誌『満州映画』を軸に、各自のテーマに沿った研究を進めていくが、2009 年度においてはまず『満州映画』の目次をデータベース化し、20 冊分（1,100 データ）の入力を終了した。

満映や中国東北部での状況を把握するため、11 月 27 日から 12 月 3 日まで鈴木、白井、上田学が満映の跡地であり、満州国の首都であった長春への調査出張に赴き、現地での映画館と劇場調査を行った。また長春図書館には『満州映画』の「満文版」が所蔵されており、演劇博物館に所蔵のない号（1938 年:第 2 期、第 3 期、第 6 期、第 7 期、1939 年:第 4 号、1940 年:第 10 号、1941 年:第 1 号、第 2 号）の目次の撮影を行い、データベースに反映させた。

データベース入力過程で、『満州映画』の「日文版」と「満文版」が別物であることが判明した。

従来の研究では、中国文化や中国映画研究方面から行われてきた満映の研究だが、本研究では映画以外の演劇も含めて研究対象に含め、中国と日本、ロシア側からの多角的な研究が可能になる。『満州映画』というテキストをデータベース化することで、各研究分野の研究にとって大いに便宜を図れるものであり、今年度の成果として有効な利用が期待される。

公募研究
6

撮影所時代を中心とする日本映画史における《演劇的要素》の再考―産業間コラボレーションとメディア複合体の形成をめぐる調査・検証・解釈―

研究代表者：志村三代子（早稲田大学演劇博物館客員研究員）
研究分担者：中野正昭（早稲田大学演劇博物館客員研究員）、紙屋牧子（東京造形大学非常勤講師）、坂尻昌平（日本大学芸術学部非常勤講師）、洪善英（翰林大学日本学研究所専任研究員）

本研究課題の目的は、主に撮影所時代の日本映画における演劇界とのコラボレーションに関する調査、検証、解釈を中心に、映画における〈演劇的要素〉と、映画における〈映画的要素〉の包摂、活用、翻案、もしくは切り離しの実践の有りようについて検証し、再考することを目指すものであった。

具体的には、「越境するステージとスクリーン」という総合テーマで、外部の研究者をコメンテーターとして招聘し、分担者がそれぞれ「1915 年の芸術座の満鮮巡業」、「占領期における《パンパン》（娼婦）の表象:『肉体の門』を中心に」、「戦時期～占領期における《芸道》映画について」というテーマで研究発表を行った。そこから改めて確認されたことは、研究者が、映画研究・演劇研究といった縦軸の研究では得ることができない横断的な視座を獲得する必要性である。「戦時期～占領期における《芸道》映画について」を例にあげると、演劇においては歌舞伎、新派、新劇といった団体がそれぞれの力関係にしたがって独自の活動をしているのに対し、映画界では、それらがすべて包括されて「芸道もの」と区分され、それぞれの第一人者が映画界に協力することで、独自のジャンルが形成されていくコラボレーションの具体的な事例を、演劇・映画双方の研究者の意見交換によって検証することが可能となったからである。この成果を踏まえて、紙屋牧子、鷲谷花（研究協力者）の二名が韓国日本学会で研究発表を行った。

公募研究 7

謡伝書の具体的理解と体系的把握へ向けた基礎作業 —演劇博物館所蔵謡伝書の翻刻と謡本の節付け研究

研究代表者：藤田隆則（京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター准教授）
研究分担者:中尾薫(早稲田大学演劇博物館助手)、重田みち(早稲田大学演劇博物館客員研究員)、恵坂悟（羽衣国際大学非常勤講師）、丹羽幸江（昭和音楽大学非常勤講師）、森田都紀（東京藝術大学大学院音楽研究科リサーチセンター特別研究員）、北見真智子（大阪音楽大学非常勤講師）

早稲田大学所蔵の江戸初期謡伝書の翻刻をつうじて、謡伝書には何が記載されているのか、その大まかな像を把握することが狙いであった。本研究の具体的作業対象として、目録（『特別資料目録5　貴重書　能・狂言編』）掲載順に、19点の謡伝書をとりあげた（マイクロフィルムのリール1巻分）。19点の謡伝書を、研究分担者が手分けして翻刻した。研究会では翻刻作業結果の読み合わせをおこない、完成度を高めた。

謡伝書が、五音の解説、謡う場所での諸注意などを中心にすえるのは、世阿弥や禅竹以来の伝統であるが、江戸初期の謡伝書は、五音などの記事の形式的反復にくわえ、謡の文字の発音、拍子の細部など、技術的な点により関心が向けられる。その結果、記述は断片化し、項目数が増えていく傾向がうかがえる。言及される作品の数も、比較的上演頻度の高い作品が中心になっていく。つまり、それだけ、記述項目は、具体的な謡の上演との関係を想定した上で選択されているということである。もちろん、その記述内容が具体的にとらえられていたかどうかは、また別の問題であるが。

江戸初期は、謡い方の中でも強吟と弱吟という分類が定着するなど、式楽化などの制度変化の中で様々な技法を安定的に維持するための工夫がおこなわれたはずである。しかしながら、本研究では、それらの変化を、謡伝書のなかに同時代的に見つけることはできなかった。謡伝書は、基本的に子弟関係の中で伝授される、いわば隠蔽される性質の知識であるため、現実の上演上の変化が、そこに即座にあらわれるような性質のものではなかろう。

翻刻の作業結果は、ホームページとして公開したが（http://jupiter.kcua.ac.jp/jtm/archives/resarc/utai/index.html）、急ピッチでおこなったためまだ完全であるとはいいがたい。今後も、翻刻データの修正作業を継続する予定である。

公募研究 8

演劇の理論と実践、その現代における応用1－メイエルホリドの場合

研究代表者：上田洋子（早稲田大学演劇博物館助手）
研究分担者：藤井慎太郎（早稲田大学文学学術院教授）、楯岡求美（神戸大学大学院国際文化研究科准教授）、内田健介（千葉大学大学院人文社会科学研究科博士課程）

本研究はロシアの演劇人フセヴォロド・メイエルホリドが 20 世紀初頭に行った演劇理論の構築とその舞台における実践を考察するものである。なかでも、彼が考案した俳優訓練システムであるビオメハニカ、および 1930 年代に実現を目指した理想の劇場に焦点を絞り、それらが実際どのようなものであったか、極力可能な形での再現を通じて実際に目にすることで考察の立脚点を築くことを目的とした。

2009 年 11 月 7 日、12 月 27 日、2010 年 1 月 16 日にそれぞれ研究会を開催し、①メイエルホリド劇場模型製作　②ビオメハニカ・ワークショップの実施、それぞれの方針を検討した。建築家の伊藤暁氏とともに、演博所蔵資料（川喜多煉七郎作成メイエルホリド劇場ポスター）を含む残された資料を検証して、観客と芝居の関係を中心に据えつつ、メイエルホリド劇場再現模型を作製。また『堂々たるコキュ』（1922）の舞台に、その装置模型を設置した。さらに、研究期間終了後の 2010 年 4 月 18 日には模型を囲む研究会を実施。メイエルホリド劇場の構想のもつ理念と実現可能性を演劇と建築の両面から立体的に検証する機会を設けた。また、メイエルホリドの孫弟子、アレクセイ・レヴィンスキー氏をモスクワから招聘し、5 日間のワークショップを実施（2010 年 3 月 1 日～ 5 日）。公募・選考により、最終的に 15 名が参加、さらに連日 15 名程度の見学者があった。3 月 4 日にはワークショップ参加者によるデモンストレーションを含めたシンポジウムを実施、ビオメハニカが現代に持つ意義を考察する場を設けた。メイエルホリド劇場で教えられていたビオメハニカを忠実に演劇の実践のための俳優訓練として伝えるレヴィンスキー氏の巧みな指導により、この訓練法の論理性と有効さが示された。このことはワークショップ後に実施した参加者アンケートからも明らかである。撮影した映像資料と併せて、2010 年 6 月に再び研究会を実施し、検証する予定。2010 年 3 月 13 日には 2009 年度の活動を総括する研究会を実施した。

公募研究 9

アジアの無形文化における芸能的身体表現の研究

研究代表者：稲葉明子（立教大学ランゲージセンター教育講師）
研究分担者：細井尚子（立教大学異文化コミュニケーション学部教授）、木村理子（東京大学大学院総合文化研究科学術研究員）

本研究は、アジアの無形文化における芸能的身体表現の資料を収集し、仮面・仮頭・化粧、そして木偶をも含めた「身体表現」の文化的・社会的効能について、共時的・通時的な比較研究に発展させるに足る分析方法を模索するべく、グローバル化の進む現代にあって併存する「従来存在していた文化コード」「変化途上にある我々が共有している文化コード」に留意しながら、今、眼前にある身体表現が何者であるか、戦略的に検証しながら記録・蓄積し、問題点を発表することを目的とする。

本年度は、これまでの海外研究者との連携をもとに、主に2つの方向で活動することができた。第一に、1938年にソビエト連邦の粛清の影響をうけて途絶えたフレーツァムを復活させたモンゴルのダシ・チョイリン寺の当事者を招いて、復元パフォーマンスを分析的に記録撮影するとともに、1月に立教大学アジア地域研究所と共催で行った国際シンポジウム「日本伎楽とチベット仏教チャムの比較研究－仮頭に注目して－」で研究発表と意見交流を行った。第二に福建省山間部に残る「華光」信仰に基づく儀式儀礼芸能の3日3晩の全過程について、木偶パフォーマンスと法師による儀礼の立ち現れ方を網羅的に記録した。こうしたコンテンツの分析にはまだ少々時間がかかるが、まずは映像資料を整理して早稲田大学演劇博物館演劇映像学連携研究拠点に寄贈し、メンバーそれぞれが今後それぞれのフィールドで成果を報告していきたい。

公募研究 10

日本ニュース映画の資料アーカイヴ基礎研究

研究代表者：濱崎好治（川崎市市民ミュージアム）
研究分担者：中村秀之（立教大学現代心理学部教授）、原山浩介（人間文化研究機構国立歴史民族博物館研究部助手）、浜崎友子（一般社団法人記録映画保存センター職員）、加藤厚子（映画専門大学院映画プロデュース研究科准教授）、山内降治（東京大学大学院学際情報学府修士課程）、紙屋牧子（東京造形大学非常勤講師）

日本ニュース映画のフィルムまたはテレシネ素材を所蔵しているのは東京国立近代美術館フィルムセンターと日本放送協会と川崎市市民ミュージアムである。本研究プロジェクトでは、川崎市市民ミュージアム所蔵のテレシネ素材をもとに、日本映画社関連資料及び同時代の日本映画と占領下の映画をリサーチし、以下の成果を得た。

（1）早稲田大学演劇博物館所蔵の印刷物「日本ニュース 第1号及至第百号(含臨時号並特報)」と「日本ニュース 第135號 - 第192號」）の複製を作成し、東宝の資料室（社団法人映画演劇文化協会）所蔵の印刷物「日本ニュース　上･中･下」等の関連資料のデジタル化を行った。

（2）上記資料を照合し、日本ニュース映画社発足以前に臨時ニュース特報が第4号まであることが判明し、またフィルムの尺、号外等、不明であった事実を確認でき、共有するアーカイヴ化をすすめることができた。

（3）日本ニュース映画社のOB名簿から聞き取り調査・録音の準備を行い、関係者のヒアリングをはじめた。

（4）東京国立近代美術館フィルムセンター所蔵の日本ニュース映画を調査し、特別映写を行った。併せて同時代 の他社が製作したニュース映画、記録映画、劇映画を特別映写し、その内容を比較・検討して日本ニュース 映画の一部が使用されているものを確認した。

沖縄県公文書館で収集した米国国立公文書館所蔵の資料を閲覧し、アーカイヴについて意見交換した。那覇市立図 書館で、散逸が危惧される貴重なフィルムであるＣＩＥ映画（ナトコ映画）を確認した。劣化が著しく、今後、研究分担者（山内隆治）が所属機関（東京大学大学院）の協力等を得て、東京国立近代美術館フィルムセンターの協力のもとに、復元して視聴できるように働きかける予定である。

公募研究 11

無声映画のプラクティス復元研究

研究代表者：上田学（早稲田大学演劇博物館助手）
研究分担者：碓井みちこ（早稲田大学演劇博物館客員研究員）、板倉史明（東京国立近代美術館フィルムセンター研究員）、今田健太郎（京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター特別研究員）、横田洋（大阪大学総合学術博物館研究支援推進員）

本研究の目的は、無声映画期における、映画興行のプラクティスの一端を明らかにすることである。今年度は、演劇博物館が所蔵する、映画興行師の駒田好洋旧蔵資料（以下、駒田資料）を主要な対象として、デジタル化によって資料の共有化を進めながら、映画学のみならず、隣接諸学の研究者と共同で調査研究を実施した。

具体的な活動内容として、以下の三点が挙げられる。第一に、駒田資料のスクラップブックのデジタル化である。駒田資料のスクラップブックは、無声映画の興行に関する新聞記事を所収しており、これらを研究で活用するために、データの採録を進めた。今年度は全６点中２点について、デジタル静止画像と対応したレコード数443件のデータを整備し、共同研究内における共有化を図った。第二に、館外機関が所蔵する駒田資料の共同調査である。太田市立新田図書館が所蔵する駒田資料のスクラップブックについて、上田学（研究代表者）、今田健太郎（研究分担者）、大傍正規（研究協力者、早稲田大学演劇博物館 GCOE・RA）が調査をおこない（群馬県、２月18・19日）、演博が所蔵するスクラップブックの欠落分について補完した。第三に、研究会を通じた研究交流の実施である。

今年度は、早稲田大学を会場として二回の研究会を開催した（１月21日、２月27日）。第一回については上田が、第二回については板倉史明（研究分担者）と松谷容作（研究協力者、神戸大学大学院・博士後期課程）が、無声映画のプラクティスに関して研究発表し、参加者との活発な意見交換がおこなわれた。

公募研究 12

日本の「国民演劇」としての宝塚歌劇 －19～20世紀の日本大衆演劇・芸能の生成に関する研究－「興行」という視座から－

研究代表者：細井尚子（立教大学異文化コミュニケーション学部教授）
研究分担者：濱口久仁子（財団法人逍遙協会事務局長）、中野正昭（早稲田大学演劇博物館客員研究員）、吉田弥生(文京学院大学外国語学部准教授)、倉橋滋樹(宝塚市人権男女共同参画課長)

文化と産業の両面で近代化を成功させた宝塚歌劇の特性を、地域社会との関係にも注目しつつ、日本の大衆演劇・芸能の中で定位し、海外文化の受容と独自化について多面的に解明するのを目的とし、それを達成するため、宝塚歌劇の外縁を同時代の諸形態、起点時に範とした歌舞伎、宝塚歌劇の構成要素である日本舞踊など日本演劇・芸能の系譜にあるものからのアプローチと、宝塚歌劇における地域社会との関係から探るとともに、それらと宝塚歌劇自体の変容とを時系列的に整理し、基礎作りを行うべく研究活動を行った。11月～３月の５ヶ月弱の活動期間であったが、全体での研究活動として３回の研究会と１回の資料調査を実施した。

第1回研究会　11月７日　於池田文庫会議室
13：45～15：30
第２回研究会　１月30日　於早稲田大学７号館203
11：00～14：00
第３回研究会　３月12日　於池田文庫会議室
15：00～17：00
於宝塚市男女参画センター
18:00～21：00

研究会では、メンバー各自の研究成果を共有し、効率的に目的を達成するための研究計画、及び共有した研究成果を各自にフィードバックした分担研究を行った。また、箕面市総務課、池田文庫など関連資料所蔵機関での資料調査、及び研究協力体制の構築を行った。

公募研究

① 日本における記録映画の受容についての史的考察
奥村賢（いわき明星大学人文学部表現文化学科 / 教授）

② 仮面舞チャムの儀礼世界の研究――チベット文化圏と日本における仏教儀礼／芸能の比較から
木村理子（東京大学教養学部 / 非常勤講師）

③ 明治・大正期の歌舞伎狂言作者および興行関係資料の研究
佐藤かつら（鶴見大学文学部 / 准教授）

④ 河竹黙阿弥の台本・正本写研究
今岡謙太郎（武蔵野美術大学造形学部 / 教授）

⑤ 近代日本演劇における＜西洋＞の受容と＜国民文化＞構築に関する発信型研究
松田幸子（筑波大学外国語センター / 準研究員）

⑥ 全体主義体制下における演劇・映像を中心としたマスカルチャーとメディアの総合的研究
貝澤哉（早稲田大学文学学術院 / 教授）

⑦ 人形浄瑠璃の復元上演に関する資料学的研究―淡路人形座を実践例として
神津武男（早稲田大学高等研究所 / 准教授）

⑧ 説明台本を基礎とした弁士の機能に関する総合的研究
上田学（早稲田大学演劇博物館 / 助手）

⑨ 点在する演劇―映像関連資料の体系的把握を通じたトータルな資料体の構築及びそれに基づく演劇史―映像史の交錯に関する研究
吉原ゆかり（筑波大学人文社会科学研究科 / 准教授）

⑩ メイエルホリドと越境の 20 世紀
上田洋子（早稲田大学演劇博物館 / 助手）

平成 22（2010）年度の公募研究成果については、テーマ研究とあわせて次号のニューズレターにて報告します。

○演劇・映像・芸能に関する学会企画支援

（平成 22 年度）

全国規模の各種学会での演劇映像学に関する企画の振興を目的としています。

AICT（国際演劇評論家協会）
国際シンポジウム･オン･アジア「国際共同制作と批評の役割」
（2010 年 11 月 21 日～ 24 日）
あうるすぽっと、東京芸術劇場

○拠点主催シンポジウム

「ボリショイ・バレエの半世紀　エカテリーナ・マクシモワとヴラジーミル･ワシーリエフの 50 年」（2010 年 7 月 12 日）
早稲田大学小野記念講堂

国際イプセン演劇祭開催記念シンポジウム「今日の北欧パフォーミングアーツ」（2010 年 11 月 22 日・23 日）
早稲田大学小野記念講堂

連続講演会「現代･中東･演劇」（2010 年 12 月 17 日･21 日）
早稲田大学 120-4 号館 101 教室

○お知らせ

早稲田大学演劇映像学連携研究拠点では毎年、
以下の公募を行っております。
詳細については公式ホームページをご覧ください。

・**共同研究課題の公募研究**（毎年 11 月～ 1 月頃）
http://kyodo.enpaku.waseda.ac.jp/

演劇映像学連携研究拠点ニューズレター1号
2011 年 2 月 21 日
編集：土居伸彰、堀切克洋
発行者：文部科学省「特色ある共同拠点の整備の推進事業」
による早稲田大学演劇映像学連携研究拠点
（拠点リーダー　竹本幹夫）
〒 169-8110　東京都新宿区西早稲田 1-6-1
早稲田大学 6 号館 221 教室
TEL：03-5286-8515　FAX：03-5286-8516
URL：http://kyodo.enpaku.waseda.ac.jp/
e-mail：kyodo-enpaku@list.waseda.jp